

天金の書なれば紙魚も棲みよからん

藤田湘子

「天金の書」でまず思い浮かぶのは、

かもめ来よ天金の書をひらくたび
三橋敏雄

の、有名な無季俳句である。まるで現代詩の一節のように、青空を背景に真っ白なカモメを呼び寄せる魔術師が連想された。「天金の書」は、憧れでもあった。

かつて、堀口大學の愛書家を訪問した折、特注の書棚に並んだ見事な蔵書の中に、本草装丁や天金の稀本を発見して、その豪華さに舌を巻いた記憶が蘇ってきた。

しかし、湘子の句の「紙魚も棲みよからん」は、何と俳味のあることか。飾らず、奢らず、紙魚のような小さな生き物にさえ、そのいのちの尊さと恵まれた環境を祝いでいるのだから。本物の純金の輝きであつて欲しい。

1686年 (558.05.19作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩